

0 10 20 30
150 cm
SEKISUI JUSHI

能書方 懐紙

目録一至五十二

740
4/23
4/23



禁中略之御會懷紙規矩四十一

春日侍中殿同詠每山

有春應 製衣和歌

三位行權大納言臣藤原顯基上

わささ乃こすふは
か来とみ 秘し 四才
乃屋海へりく 故きき
ふさき

春日侍太上皇仙洞周詠詠月以

親王后宮御會

春日同詠每山有春

應令和歌

或春日侍東宮同詠春日侍一品大正高閣
江崎同

攝開

春日同詠每山有春

應教和詩

禁中常之御會

春日同詠每山有春

和歌

權大納言藤原顯基

わうやき乃こす来は
かきとみし秘し四男
信屋より秘し来とみ
ふ守理

春日詠每山有春

和歌

権大納言顯基

大納言の人持開親王帝の御舎也此
但家礼の人と無相そつとも同の字
加へりある同姓とよむ親王御舎の
つとも姓を加ふ也

自らの舎

詠每山有春

和歌

権大納言顯基

わのやとふこす来は
か来とみし極り四
乃屋に極り来とみ
ふ来とみ

懐線の綴組

春。日斗サ國事ハ春ハ日ハ始ナリ

秋日同詠兼有
長江和歌
此長江の和歌の
上あけて一和歌上切又
一和歌上切又

夏目秋目冬目ハ春ハ日ハ始ナリ
牛サヤハ春ハ日ハ始ナリ
先ハ上草ハ日ハ始ナリ
春ハ日ハ始ナリ

冬日同詠霜埋落葉

瑞造と秋の志中ハ
冷影ハ日ハ始ナリ
和歌

宮内卿藤原行純

けくやゆり。木はくも
けくやゆり。木はくも

けくやゆり。木はくも
けくやゆり。木はくも

けくやゆり。木はくも
けくやゆり。木はくも

けくやゆり。木はくも
けくやゆり。木はくも

二首懐線四二

李同姓のふと金庫より

夏日同詠二首和歌

尤迦衛大将藤原名系

曉水鷗

あさみづうみ

あさみづうみ

あさみづうみ

山家橋

あさみづうみ

あさみづうみ

あさみづうみ

此書は二巻の功名の人々

夏目同詠曉水鶴和歌

元迎衛大将藤原基孝

あきふとややみ鶴いそく

あきふとややみ鶴いそく

月のさけり

山家鶴

あきふとややみ鶴いそく

あきふとややみ鶴いそく

あきふとややみ鶴いそく

三首懐紙四十二

初の巻を端作(かた)りし

冬目同詠三首和歌

中納言藤原基孝

雪中早梅

あきふとややみ鶴いそく

あきふとややみ鶴いそく

あきふとややみ鶴いそく

海邊子鳥

あきふとややみ鶴いそく

あきふとややみ鶴いそく

あきふとややみ鶴いそく

寄神祝言

あきふとややみ鶴いそく

あきふとややみ鶴いそく

季書をよみし時久しき所なりと云ふ

詠二首和歌

題

詠三首倭詞

題

瑞雲はくちとて公出の春夏桃を
同等の姓を有る會亭次男
料紙武蔵の北陸目よりいふ事

夏日同詠五首和詞
侍従藤原万雄

夏曉

えりくちをむとて門をきき
ふもりのひくくめをきき
み孫のくちを

夏朝

けきわくふをのふれあき
はのちうてあをきき
木よりあき風

夏夕

夕たらのすきりきき

すゝめさ木々に鳴きつ
ちみさふ海を

夏夜

あゝけをぬくぬくわさ
ふふ寝小婦ふふやき

夏のふき

夏夜

あつこい月やうきや
あつこい月やうきや

あつこい月やうきや

六首四十五

六首は懐紙五首の一首多き近也

梅香田柳家柳誰か水邊踞踞故郷歌を
雨申藤花山家暮春

七首懐紙四十五

秋夜星河七夕秋昔古き心深きにまき

料紙二枚

穂日同詠七首和歌

正二位藤原實陰

七夕月

海に起つふ月乃ちうや
けむんわのもぬさるさ
ふ之合のさ

七夕風

すゝめさ木々に鳴きつ
ちみさふ海を

七夕河

あつこい月やうきや
あつこい月やうきや

六首は懐紙五首の一首多き近也

中流の如き

七夕草

むしほのあゝきり
夕のあけすてをけ
花をあら

七夕鳥

くねくねのあゝきり
夕のあけすてをけ
けの契を

七夕扇

あゝきりふたきり
夕のあけすてをけ
あゝきりふたきり

七夕祝

あゝきりふたきり
夕のあけすてをけ
あゝきりふたきり

九首四十六
十首四十七

春日同詠十首和詩

権中納言藤原集秋

竹裏寫

あゝきりふたきり
夕のあけすてをけ
あゝきりふたきり

水邊柳

あゝきりふたきり
夕のあけすてをけ
あゝきりふたきり

春雨

あゝきりふたきり
夕のあけすてをけ
あゝきりふたきり

十首進
二約七
七約七
七約七
七約七
七約七
七約七
七約七
七約七
七約七

くぬけりし神さぬきて
のむねをさう

折花

けしきさくらちぢく人さ
なすいさく世き皆花の
けしきさくら

松上藤

ゆみとるさくらもさくら
きうさくらさくらさくら
さくらさくら

不逢意

さくらさくらさくらさくら
さくらさくらさくらさくら
さくらさくら

後期恋

さくらさくらさくらさくら

さくらさくらさくらさくら
さくらさくらさくらさくら

曉花

梅の春さくらさくらさくら
さくらさくらさくらさくら
さくらさくら

旅行女

さくらさくらさくらさくら
さくらさくらさくらさくら
さくらさくら

神祇

すみさくらさくらさくら
さくらさくらさくらさくら
さくらさくら

十音四十八
十音四十九

十五音の時辰二首不長
よはし

穩夜同詠十五首和詠

内大臣藤原寄詠

十五集月

久しき月も木もあつはきく形
月のわきみこころひかりけり

月前風

すじ月の新すきゆへ更なる
いとせきねたきものうら風

月前露

風わくぬきえの枝も花らつて
月もそれこそふく^雲城の露

山月

けり引の山端よりそそすみて

そそけりあまづつふ月の中

野月

草花原のそものあふるつて
きくにきくは月の新なる

浦月

次なる浦やそとのとけて立ぬ
月もゆき次橋のとそ風

花傍月

すみもよみてきたははねとひ
月のそとををれきき

故郷月

あふるつてあはれはあみそ
月もそとををれきき

山家月

うぐも風ふくそとををれき
木の葉のそとををれきき

月夜馬

月夜の馬はさうなまはさうなまは
さうなまはさうなまはさうなまは

月夜虫

さうなまはさうなまはさうなまは
さうなまはさうなまはさうなまは

月夜鐘

さうなまはさうなまはさうなまは
さうなまはさうなまはさうなまは

月夜燕

さうなまはさうなまはさうなまは
さうなまはさうなまはさうなまは

月夜迷懷

さうなまはさうなまはさうなまは
さうなまはさうなまはさうなまは

月夜神祇

さうなまはさうなまはさうなまは
さうなまはさうなまはさうなまは

十五首懐紙必斯二行書料紙三枚
十五首目もと草書事一巻古實也
十二夜十首二首不足すてて云は
月行也詠草も十首以上と草書事
定家卿五首詠草一行書下草は
周百首懐紙二行書下草あり其後
院古もと云は云は云は云は云は
元京若夫平氏康朝臣の二十首懐紙
不思飯と得之^{をまね}料紙板本四枚
二行書二十首目もと草左れと

五十

詠二十首和歌

元京大夫氏康

朝霞

あまのあけぼののいろはに風も
あそむるにねのせうたら

若草雪

けふのあけぼののいろはに風も
あそむるにねのせうたら

雪隠

雪隠のいろはに風もあそむるに
ねのせうたら

待花

あやめくれ世とてあられ山橋

あやめくれ世とてあられ山橋

新樹風

春のいろはに風もあそむるに

あやめくれ世とてあられ山橋

夏草花

あやめくれ世とてあられ山橋

古宅壁

あやめくれ世とてあられ山橋

初穂

あやめくれ世とてあられ山橋

籬下坐

あやめくれ世とてあられ山橋

野外月

山陽より又さきつるも武蔵野の
くさき花よりつはる月影

浦月

あなつて誰の霞を霞あはれ
あつてつるも月影

水鳥

さびしうちうちの中より野の
あなつて誰の霞を霞あはれ

霜降落葉

苔の上よ木の葉も霞のくさき
あなつて誰の霞を霞あはれ

煙火

うつろひの春をいそぐ花も
霞のうつろひをいそぐ

待月

婦人ふりてふりて月影をいそぐ

はるも月影をいそぐ

歌海系

あなつて誰の霞を霞あはれ
あなつて誰の霞を霞あはれ

平憐系

吹やたおるふりて月影をいそぐ
あなつて誰の霞を霞あはれ

寄海迷懷

月ふりて月影をいそぐ
あなつて誰の霞を霞あはれ

寄島懷旧

あなつて誰の霞を霞あはれ
あなつて誰の霞を霞あはれ

祝言

梓弓より月影をいそぐ

しるしつらきもすれ
しるしつらき

二十首五十

冬日同詠二十首和詩

泰議右大辨藤原光廣

霞中滝

山ぞみおつとくはきすや
かきんのかれけりてけ

梅葉松

梅ゆかりとくはきすや
うきぬきとくはきすや

春月

わきとくはきすや
かきんのかれけりてけ

独見花

ほくくともむむつふ咲出
むくくくろのふさやけい

嶺花

夕陽をふおのふねの木間より

つるつるはの橋をくくろ

落花

さくばつおけいをふれかみそ
ふれいふふふ風う吹

野雲権

あへてばさきさきうききき物事
すそつむうれ床をぬ

郭云

百子たいさけいさけいすけい
こやきとてなうきき

五月雨

ふくくくくくくくくくくく

時をさくぬ五月をさく

澤登

浮草のさけいさけいさけい
はくくくくくくくくく

七夕

仍もさくくくくくくくく
はくくくくくくくくく

女郎花

ふくくくくくくくくく
あきさきさきさきさき

忌麻

五くくくくくくくく
はくくくくくくくく

菊生花

ぬきくくくくくくく
はくくくくくくくく

待月

よむくれ月を海にほのめふ
つねにをきと離つてはな

湖上月

さやのけふ月のひろにみえ
かみとこゆるゆはう海つ

襟衣

ほろけをきりしきりてきり
ほろけをきりしきりてきり

時雨

吹くぬ嵐うそれをきり
きりしきりしきりてきり

曉子鳥

何れかきりしきりてきり
あはれきりしきりてきり

炭竈

やうと又あまのきりしきり
きりしきりしきりてきり

忠意

いふきりしきりてきり
きりしきりしきりてきり

不逢意

いふきりしきりてきり
きりしきりしきりてきり

蘭意

いふきりしきりてきり
きりしきりしきりてきり

神達意

いふきりしきりてきり
きりしきりしきりてきり

別意

いふきりしきりてきり
きりしきりしきりてきり

ふいにいふやうなもののこと

恨意

いふにいていふのふいふと云ふ事なす
おもしろいものなりと云ふこと

縁意

たふし世に生れていふことと云ふ
たふし世に生れていふことと云ふ

古寺鐘

こゝろすもの豊満のちれ目もあつて
みよにすもの入ねのちれ

懐行

たつてあつていふことと云ふ事
たつてあつていふことと云ふ事

神祇

あつていふことと云ふ事
あつていふことと云ふ事

ふいふやうなものは

三十字懐紙書法

墨の節を引合の巻目也上松永月がね
朱の節を引合の巻目也上松永月がね

書時のこと

書時のことと云ふこと
書時のことと云ふこと

書時のことと云ふこと
書時のことと云ふこと

書時のことと云ふこと
書時のことと云ふこと

書時のことと云ふこと
書時のことと云ふこと

書時のことと云ふこと
書時のことと云ふこと

書時のことと云ふこと
書時のことと云ふこと

五十一

春日同詠五十首和歌

九思衛権将藤原寄詞

春十二首

初春

久しれあはれうさあむしう

けききうさあむしうさあむしう

霞

霞あけくさくさうさあむしう

みくさくさあむしうさあむしう

朝鸛

花をゆいもはなうさあむしう

さあむしうさあむしう

梅葉風

そのけの梅のたれえとるほん
おもむれおもむけま風

柳

けさけの吹く風ふきまふ
けさけのけさけのふ

帰鴈

けさけのけさけのけさけの
けさけのけさけのけさけの

春曉月

月さきとさきとさきとさきと
けさけのけさけのけさけの

山花

山さきとさきとさきとさきと
けさけのけさけのけさけの

林中花

梅もさきとさきとさきとさきと
おさきとさきとさきとさきと

落花

花もさきとさきとさきとさきと
さきとさきとさきとさきと

藤

けさけのけさけのけさけの
けさけのけさけのけさけの

暮春

けさけのけさけのけさけの
けさけのけさけのけさけの

夏七首

葵

けさけのけさけのけさけの
けさけのけさけのけさけの

郭云

ついでに山分りてすれどい
世はあつてもと家なむい

早苗

みやちもきつたあは成ふう
いふはあつてもおひきかた

水鶏

あつてもふたつ水鶏のあつても
いふのあつてもあつても

五月雨

いふもあつてもあつても
あつてもあつてもあつても

夏草

あつてもあつてもあつても
あつてもあつてもあつても

螢

あつてもあつてもあつても
あつてもあつてもあつても

あつてもあつてもあつても

細涼

あつてもあつてもあつても
あつてもあつてもあつても

穂十二首

七夕

あつてもあつてもあつても
あつてもあつてもあつても

花

あつてもあつてもあつても
あつてもあつてもあつても

女郎花

あつてもあつてもあつても
あつてもあつてもあつても

あつてもあつてもあつても

あきけすきのあけいけき

鹿

園まにわ〜〜鹿のぬきま
あけけすきのあけいけき

待月

月まるとあけいけき
つよや海まの夕暮れき

木間月

木まにわ〜〜あけいけき
今まのちまの秋のよ月

惜月

あけいけきあけいけき
あけいけきのあけいけき

夕暮

夕暮や秋のあけいけき
あけいけきのあけいけき

秋衣

あけいけきのあけいけき
あけいけきのあけいけき

紅葉

あけいけきのあけいけき
あけいけきのあけいけき

九月盡

あけいけきのあけいけき
あけいけきのあけいけき

冬七首

時多

あけいけきのあけいけき
あけいけきのあけいけき

庭霜

あけいけきのあけいけき
あけいけきのあけいけき

水

内河のわやうすん甘すん
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

千鳥

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

雪

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

炭竈

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

鷹狩

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

恋六首

恋六首

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

祈禱

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

後朝

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

神達

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

増

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

恨

はらへてふのやにあらみても
れらのおひよそふいけい

雜六首

名所浦

浦よりふり巻く

むろりといふはた弱み

山家

わく山女どもありたもあみきて
そある水へ人よまゝもえ

穠

舟をひきする 芦の丸屋の巻けもい
 はなをさうつむ 舟をさうつむ

夢

うた寝のまはつをいおほ
むしの人をよもみすや

述懷

風物とくちのそらにわたりて
たゞ身をまかせたはる

祝

海よりわねをすくつゝをさへて
をさへてをさへてをさへて

とくす好

右のとく也。そのもろ一尺二寸紙數定
あり。春二首と斗りて題をわぬ。
是あり。を時を交といふ。へく書けり。
此は法よ。交を交れ。夏。秋。冬。とありて
る。帝親王の書。そのまゝ。園太暦。
その他。右の法。是る。帝親王。所筆。
寫納之。百首。懷紙也。

五十二

春日同詠百首和歌

侍從藤原古詩

春二十首

初春

何れの心もよくつばき目
うもふてまゐりにう

震

あふんをふれ天は好くも

百首とて春二十首夏十五とて槐花首
冬十五とて秋十五とて雜十五首也書法
五十首とあるは錢の體自云く振つる
つてもう一志のまゝも體自云く又もす

よく思ふへい言うても料紙を
二尺二寸也 圖を曆
紙敷小定大概十五枚程
して誦あつ季同姓乃有之常此也
ありと百首目い下草み也
主家の百首懐紙
綱之希代に幾能也

續歌五十二

法に三つあるが、是も此懷紙
 に書ける書やうに古白首に風振れて古
 かつた左様と。是は公意を主海
 河のさうな策も悉くさうな黙滅して
 名をさるす。是は沖料紙を子世に
 たりと。是者亦多井殿

元亭三季七夕於龜山殿有之已一息始之美曾詠
或獨以復春邦云傳之謬所經季及半更者退出
九日以下短冊於前大納言續進之十三日平陸卿前
清書之十六日為以使持向亞相亭勅定云續進之被
着者不依貴錢可息進之由被任下云云先是勅
兵百十九首別有御書寫此因續撰御息五十二首
敘御孝子不及其孫之披露之由限有此少佐
依有披露之煩移加勅兵百廿一首莫免乎勿乞已
是八飛殿吉首の興也つゝ云云云々云々是短冊と云々
は云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々

續百首和歌

春二十首

年内立春

春を待つをわが心とて思ふ事ありに
あはれもいふはなれども思ふ事ありに

山霞

親長

春雪

成任

以下各月日

寄日祝

何れも花より山より水より日
空にまはるぬ世のひより何れ

偽茶愚然女五首

祐雅上

愚詠

七首

兵部卿

三首

良養丸

成任

一首

何れ丸

親長

六首

李春

三首

天保十一年三月廿四日

九州大學圖書印

